

編集後記

一昨年(2019年)の9月に本学会会誌編集委員を拝命し、約1年半が経過しました。当初はシステムを理解しておらず、それほど大変ではないだろうと高をくくっていたところ、月に2回から3回日本郵便のエクスパックがドサッと配送されてきます。中から論文が溢れてきます。

それまで送られた査読した結果をメールで送り、月に1度学会事務局の会議室へ赴き、編集委員の先生方と評価を行っていきます。非常に熱心な方ばかりで、圧倒されつつまた非常に勉強にもなりながら、委員会が進んでいきます。午後6時から始まり3時間かかります。皆、良い雑誌にするために投稿された貴重な論文をブラッシュアップして掲載し、著者にも読者にも有益になるようなスタンスで進めています。厳しいコメントも少なくありませんが、皆のためになると信じて書かれています。

邦文誌は業績評価における Impact Factor 至上主義の波を受け、空洞化の傾向が進んでいます。その中で本誌は投稿論文も多く、そのため採択率も低く、もっとも厳しい邦文誌の1つに位置し頑張っていると思います。しかしながら、やはり本誌においても原著論文は少なく、いかに増やしていくかが課題の1つです。世界への情報発信もグローバル化の今の時代には重要に違いはないのですが、自国の仕事を自国の言語で読み書きすることも極めて重要だと思います(問題はその論文を自らが評価しないことです)。本誌は本学会の公式英文誌として契約している Digestive Surgery と提携し、Digestive Surgery に掲載された原著の邦文訳を二次投稿として本誌に掲載することを許諾しています。KARGER 社から図表の掲載許可を受けること、邦文訳であることを明記することが条件となるのは言うまでもありません。きちんとしたルールを守らない場合は二重投稿となり、学問の世界からは追放されることとなります。このことは現在では、その申請に業績が条件となっている専門医からも追放されてしまうことと同義語になってきます。研究においても臨床においても倫理に則して物事を進めることが極めて重要なことであります。このシステムを活用し、日本のすばらしいデータを世界へ発信しながら、自国の文化を育てるということをどんどん進めていっていただきたいと考えています。昨日も仕事の終了後、遅くまで査読していました。良い雑誌にするために会員皆様の協力が必要です。すばらしい原著論文の投稿を待っています。

(松原久裕)